大阪狭山市文化財報告書23

平成13年度狭山藩陣屋跡発掘調査報告書

平成14年（2002年）3月31日
大阪狭山市教育委員会

1・調査にいたる経過

ここに報告するのは大阪狭山市教育委員会生涯学習推進課が発掘調査を実施した狭山藩陣屋跡01－2区の成果である。01－2区は大阪狭山市四丁目狭山に所在し、この場所で行われる住宅建設工事に先だって発掘調査を実施したものである。開発者の柏村康輔氏には調査にあたってさまざまなご配慮をいただいた。謝意を表したい。

発掘調査は2001年5月28日から6月10日まで生涯学習推進課の市川秀之を調査担当者として実施した。遺物実測、トレースなどの作業は、若宮美佐、橋本和美、笹岡裕里子が行い、報告書の執筆は市川が担当した。

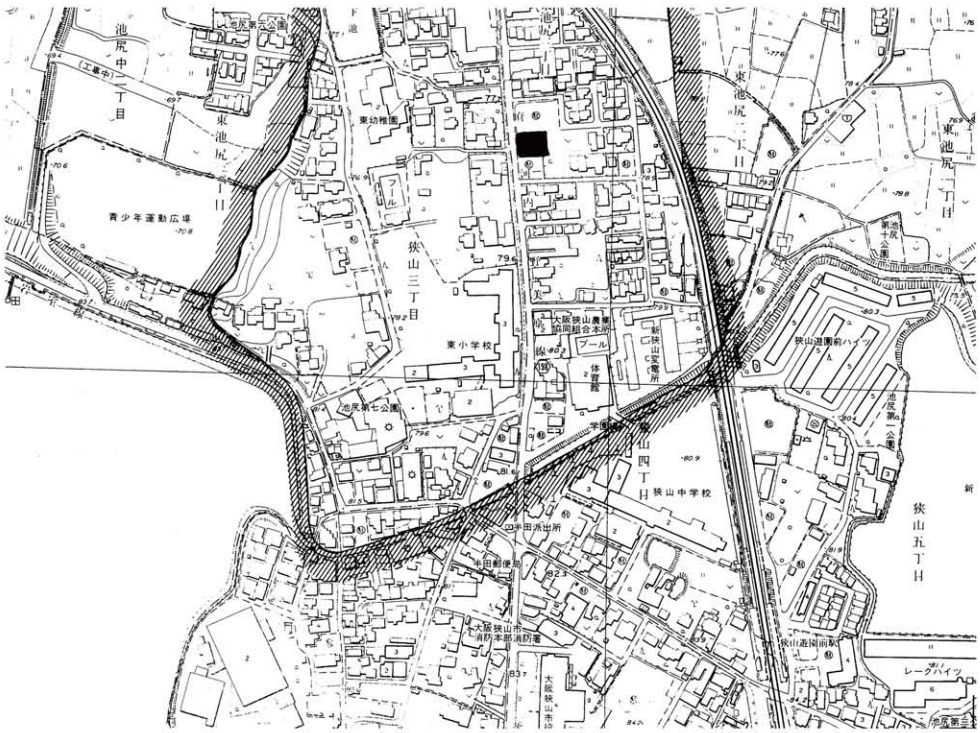


図1　狭山藩陣屋跡01-2区　位置図（S=1/5000）

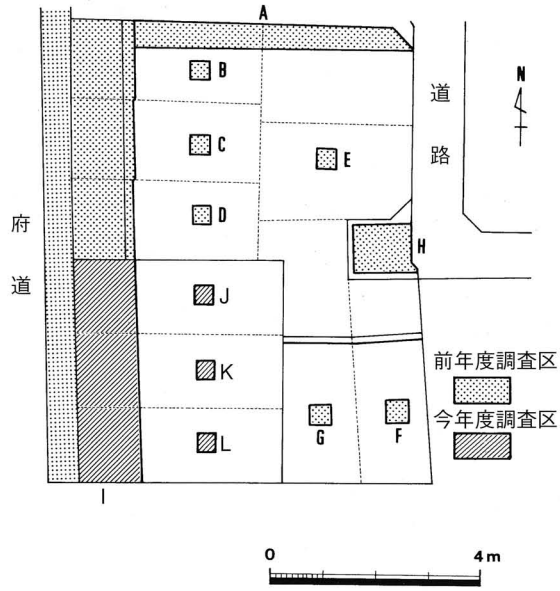


図２　調査区の名称

予定される建築は現状地盤の上にさらに盛土を施す設計であったため、これまでの周辺地域での調査成果から考えて、住宅基礎の遺構面に対する直接的な影響は少ないものと思われた。そこで全面的な掘削が行われる駐車場部分（５ｍ×20m）について調査を実施するほか、遺構の全体的な状況を把握するため各敷地区画ごとに２ｍ四方の調査区を計３箇所設けて発掘調査を実施することとした。調査区の位置関係、名称は図２の通りである。なお本調査区の北側および東側については昨年度に本市教育委員会が同様の調査を実施し、すでに報告書を刊行しているので、図２にはその調査地の箇所も掲載している（「大阪狭山市文化財報告書21　平成12年度狭山藩陣屋跡発掘調査報告書」　2001年）。また今年度調査を実施した各調査区は前年度の調査区（A～H区）との連続性を重視し、I～L区と呼称することとしたい。

２・遺構

狭山藩陣屋は近世初期に北条氏によって設けられた近世城館であり、明治維新まで継続した。陣屋は上屋敷と下屋敷にわかれ、今回の調査区は上屋敷に含まれている。上屋敷内は中央を南北に大手筋（現在の府道河内長野美原線）が走り、もっとも北側に藩主の居宅（御殿）が存在した。01－2区はこの大手筋に東接し、御殿にも程近い立地である。

今回の調査区の周辺においては、すでに数次の発掘調査が実施され、その結果上下２面の遺構面が存在することが明らかになっている。上層の遺構面は現在の地盤面よりも20ｃｍから30ｃｍ程度下方に所在するものと思われるが、今回の調査区においてはこの面を検出することができなかった。おそらくは過去の造成によって上の遺構面はすでに掘削されたものと思われる。本調査区では結局１面のみの調査を実施しているが、この面は周辺の調査区でいうところの第２遺構面に対応することになるだろう。

（Ｌ区）

調査区全体のうち東端の南北20m、東西5mについては駐車場などの設置が予定され、面的な掘

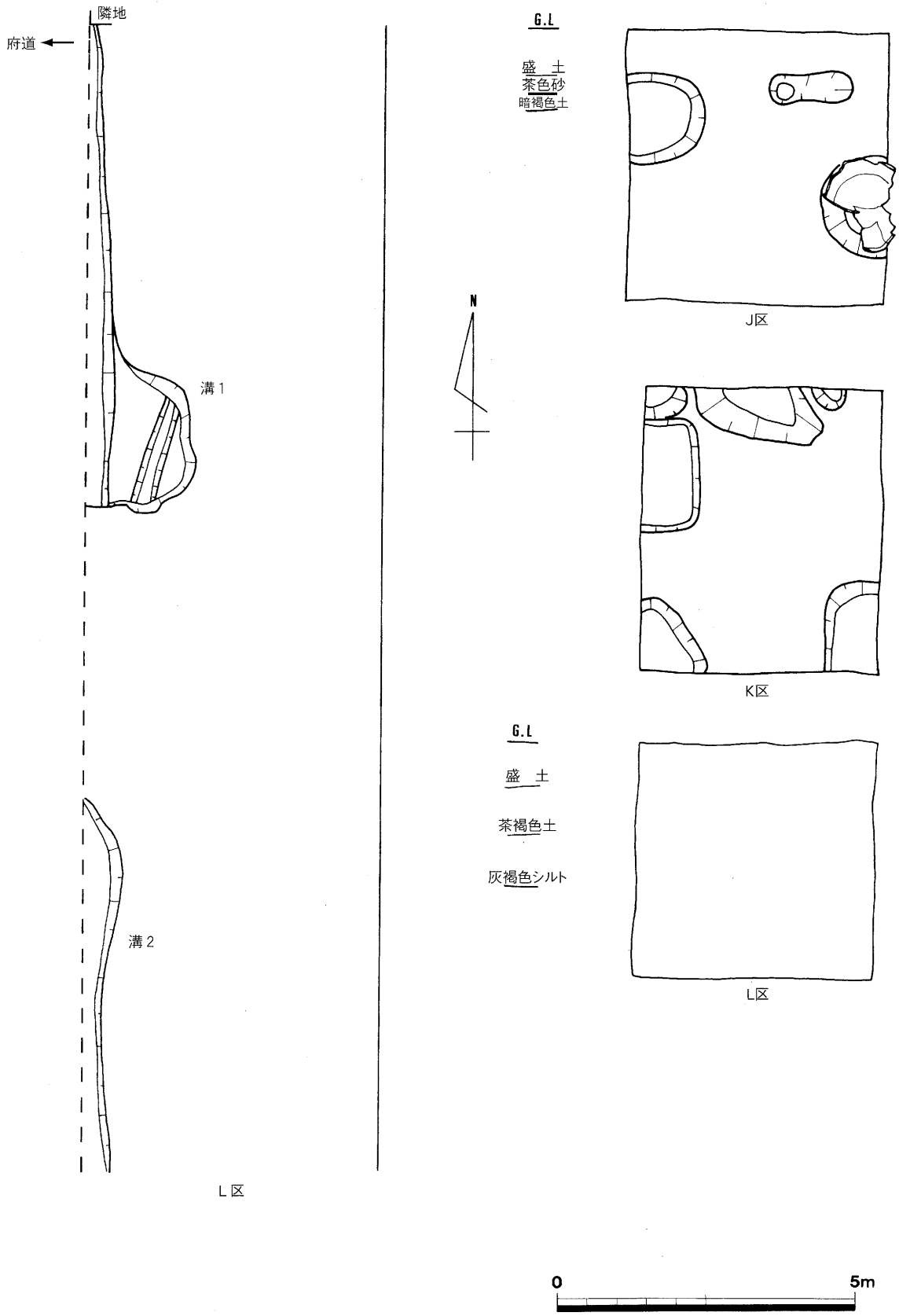


図3　狭山藩陣屋跡01-2区　遺構平面図

削が計画されていたため、全面的な発掘を実施した。現状の地盤より60ｃｍ下がった場所（ＴＰ78.1m）で黄褐色シルトを主体とする締まった面が存在するが、この面が周辺地域における発掘の成果から遺構面であると判断された。この面において人力で精査をおこなったところ、遺構は非常に少なく東端において南北方向の溝２条を検出したのみであった。北側の溝１は調査区内で長さ810ｃｍ、西側の肩が検出されていないので幅は不明であるが、調査区内での平均的な幅は40ｃｍ、南端において円形に広がりをもち東西180ｃｍとなっている。また深さは最大で15ｃｍで、底部は南から北に傾斜する。南側の溝２は調査区内での長さ650ｃｍ、幅75ｃｍ、深さ12ｃｍでやはり底部は南から北へ傾斜する。

（Ｊ区）

調査区の東側には３軒の住宅の建築が予定されていたが、現状地盤の上に盛土を施し、また建物基礎も浅いために、住宅建築によって遺構が破損する可能性は少ない。したがってこの部分については３軒の敷地のそれぞれ中央部分において２ｍ四方の小さな調査区を設定し、遺構の深さや性格を観察することとした。

一番北側のＪ区においては、現状の地盤から40ｃｍの深さまで最近のものと思われる盛土があり、そこからさらに30ｃｍ掘削したところで遺構面に到達した。この面では３箇所の土壙を検出した。もっとも東側の土壙は埋甕遺構で、堺産の土師質の甕が埋められており、それ以外に土師質甕、土師皿、土人形、瓦などが出土している。

（Ｋ区）

この調査区においても、現状地盤の下に40ｃｍの盛土があり、その下の暗褐色土（厚さ20ｃｍ）を除去したところ遺構面を検出した。そこでは６箇所の土壙を検出している。それらの配置には特に規則性は認めがたい。またこれらの土坑内部からの遺物の検出はなかった。

（Ｌ区）

この調査区においては深さ150ｃｍまで掘削を行ったが、全く遺構面らしき地面を検出するに至らず、また周辺からの湧水が激しく調査の続行が困難となったため、遺構面の検出は断念した。地表近くに40ｃｍほどの盛土が施してあったのは他と変わるところがないが、その下の土は灰褐色シルトであり、溜池などに堆積した土を思わせる。遺構面の深さや湧水の激しさを考え合わせると、この調査区全体がため池の内部に含まれている可能性が高いだろう。

３・遺物

本調査区において出土した遺物のうち実測が可能であったものは、図４に掲載した７点であった。いずれもＪ調査区の埋甕遺構内から出土している。1は土人形で犬である。完形。高さ5.8ｃｍ、最大幅2.7ｃｍ。色調は明灰茶色。底部は平たく像は直立するように作られている。2も土人形で上下を着した正装の少年である。頭髪はないので茶坊主かもしれない。高さ5.0ｃｍ、最大幅2.3ｃｍ.色調は明茶色であるが、ところどころに朱色の顔料が残る。3は土師器皿。完形である。口径9.9ｃｍ。器高1.1ｃｍ。色調は灰茶色。4は土師器皿。一部を破損する。口径9.4ｃｍ。器高1.3ｃｍ。底部に棒の先で引っかいたような細い線が3本残る。使用に伴う痕跡であろう。また口縁の一部にススが付着している。5は瓦の瓦当部分。径は14.0ｃｍ。巴文の周囲に連珠を施す。6は堺産の土師質かめ。口径24.6ｃｍ。残存高12.0ｃｍ。7も堺産のかめ。上部が破損し口径不明。残存高19.7ｃｍ。

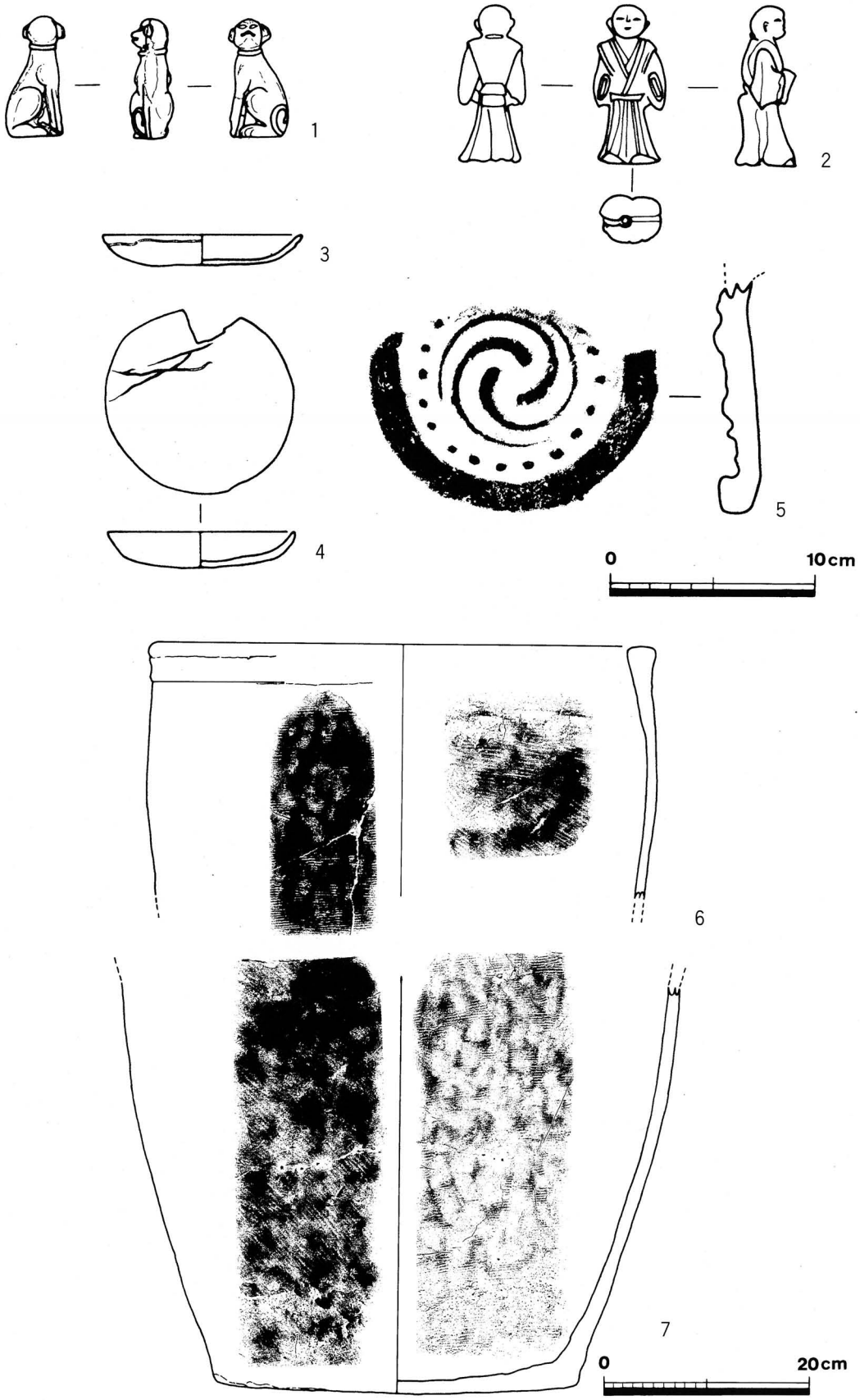
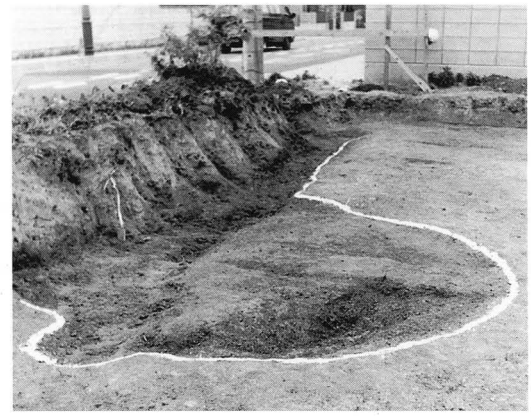


図４　狭山藩陣屋跡01-2区出土遺物

1. 調査前

2. Ｉ区全景

3. Ｉ区溝2

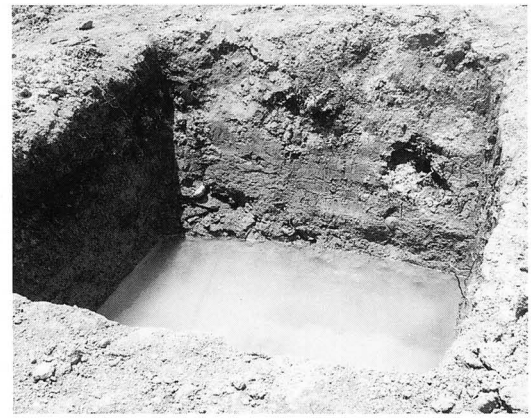


4. Ｉ区溝1

5. Ｊ区全景

6. Ｊ区埋甕遺構

7. Ｋ区全景



8. Ｌ区全景

図４　狭山藩陣屋跡01-2区出土遺物

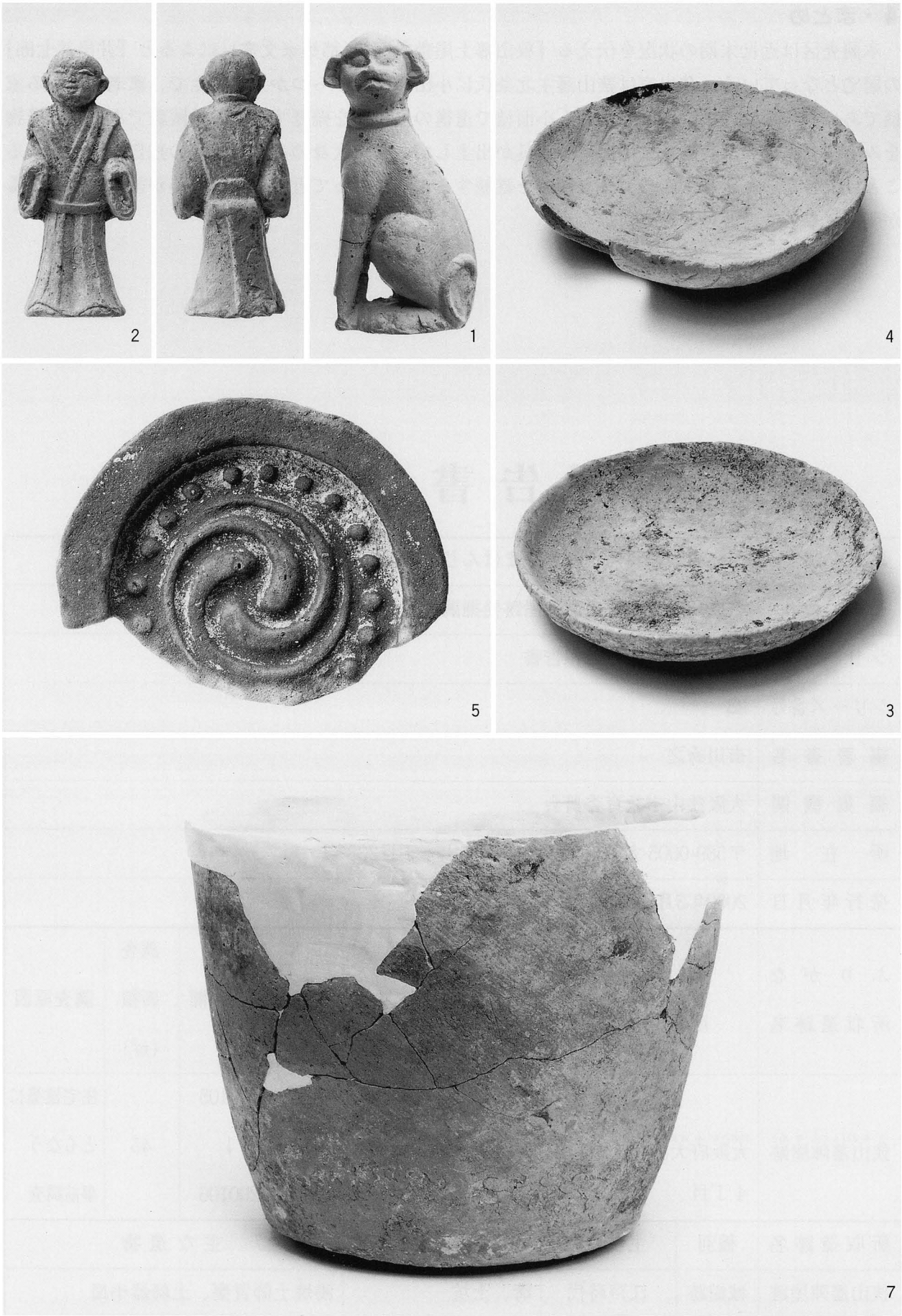


図４　狭山藩陣屋跡01-2区出土遺物

4・まとめ

本調査区は近世末期の状況を伝える『狭山藩上屋敷絵図』（都築家文書）によると『井出甚七郎』の居宅となっている。井出家は狭山藩主北条氏に小田原時代からつかえた家臣で、家老を勤める家柄であった。今回の調査区はいずれも小面積で遺構の広がりを確認することは困難であるが、遺物をみる限り近世の一般的な生活道具や遊具が出土しており、大身の武士としての独自性を特にみることはできない。今後もこのような調査を継続することによって近世の陣屋の姿が徐々にではあるが明確になることと思われる。

報告書抄録

ふりがな	へいせい13ねんど　さやまはんじんやあとはっくつちょうさほうこくしょ
しょめい	平成13年度　狭山藩陣屋跡発掘調査報告書
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書
シリーズ番号	23
編著書名	市川秀之
編集機関	大阪狭山市教育委員会
所在地	〒589-0005 大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384-1
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
さやまはんじんやあと 狭山藩陣屋跡	おおさかふおおさかさやましさやま 大阪府大阪狭山市狭山 4丁目	27231		34° 30′ 15″	135° 33′ 30″	200105 ↓ 200106	45	住宅建築にともなう事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
狭山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代	溝、土坑	湊焼土師質甕、土師器小皿